

[課程-2]

審査の結果の要旨

氏名 末次 美子

本研究の目的は、正期産の母親を対象として、出産時心的外傷とボンディング困難性の関係を検証することである。まず【研究1】において、日本語版PBQの信頼性・妥当性の検証と因子構造を探索するために、横断的関連検証・因子探索研究を行い、次に【研究2】において、母親の出産時心的外傷とボンディング困難性との関係について検証するために、縦断的仮説検証研究を行い、下記の結果を得た。

【研究1】

研究1の目的は、1.日本語版PBQ (Postpartum Bonding Questionnaire)を作成し、日本語版PBQの信頼性・妥当性を検証すること、2.日本語版PBQの因子構造妥当性の検証による短縮版の日本語版PBQを作成し、その信頼性・妥当性を検証することである。

25項目版PBQにおいて、内的整合性・再テスト法において信頼性が検証され、構成概念妥当性・基準関連妥当性・既知集団妥当性によって妥当性が検証された。次に、探索的因子分析を実施し、4因子14項目が抽出され、4因子はそれぞれ、「阻害された絆(factor 1)」、「拒絶と怒り(factor 2)」、「育児不安(factor 3)」、「愛情の欠如(factor 4)」と名付けられた。14項目版PBQにおいても、内的整合性・再テスト法において信頼性が検証され、構成概念妥当性・基準関連妥当性・既知集団妥当性によって妥当性が検証された。

【研究2】

研究2の目的は、1.正期産の母親の、出産後1か月時点における、出産時心的外傷とボンディング困難性の関係を明らかにすること、2.正期産の母親の、出産後3か月時点におけるボンディング困難性への、出産後1か月時点での予測因子を明らかにすることである。

研究2の仮説は、1. 正期産の母親において、出産後1か月時点では、出産時心的外傷が高い方がボンディング困難性は高く、出産時心的外傷はボンディング困難性の関連要因となる、2. 正期産の母親において、出産後1か月時点の出産時心的外傷は、出産後3か月時点におけるボンディング困難性への予測因子となる、であった。

出産後1か月時点のPBQ25/PBQ14を従属変数とした重回帰分析では、IES-Rは有意な標準化偏回帰係数であった。出産後3か月時点のPBQ25/PBQ14を従属変数とした重回帰分析では、出産後1か月時点のIES-Rは有意な標準化偏回帰係数ではなく、出産後3か月時点のPBQ25/PBQ14を最も予測する因子は出産後1か月時点のPBQ25/PBQ14であった。

以上、出産後1か月の正期産の母親を対象に、25項目版PBQおよび14項目版PBQの信頼性と妥当性が実証された。また、出産後1か月時点の出産時心的外傷は、ボンディング困難性

の関連要因であった。出産後 1 か月時点の出産時心的外傷は、出産後 3 か月時点のボンディング困難性の予測因子ではなかった。出産後 3 か月時点のボンディング困難性の主な予測因子は、出産後 1 か月時点におけるボンディング困難性であった。

本研究結果より、出産時心的外傷によりボンディング困難性を抱きうること、そして出産後 1 ヶ月時点で出産時心的外傷が高い母親は出産後 3 ヶ月時点においても持続する可能性があることが示された。ボンディング困難性への支援には、出産時心的外傷へのアプローチが効果的である可能性が示唆され、出産時心的外傷の関連したボンディング困難性を抱える母親への支援方法の開発に重要な貢献をなすと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。